

1. 目的・手法

この訪問では大学図書館内での活動が活発であるとされているアメリカの大学図書館において、実態調査と質問紙調査をすることを目的とする。これによって大学図書館内での活動が活発とされているアメリカの大学図書館の現状と利用実態を把握することができる。

2. 結果

本研修を実施するにあたって、The University of Chicago に問い合わせを行ったが不許可であった。そのため North Carolina State University の Hunt Library(訪問日:2015/03/02)と D.H. Hill Library(訪問日:2015/03/02)及び University of Illinois から Undergraduate Library(訪問日:2015/03/05)と Grainger Engineering Library(訪問日:2015/03/06)を調査対象館として選定した。この 4 館において質問紙調査の依頼をしたが不許可であった。そのため、どのような空間であるとより学生がディスカッションを行っているかを明らかにすることを本研修の中心的な目的と位置づけ直し実態調査、行動観察調査を行った。また必要に応じて図書館員(司書含む)や学生にインタビュー調査を行った。

2.1. North Carolina State University

D. H. Hill Library の建物は 9 階建てであり、2 階部分にラーニングコモンズが設置されている。書籍は 2 階以上の自動書架におさめられている。大学院生が使用する部屋以外は会話が可能であり、それぞれの空間は壁で区切られている。机は可動式の物と固定式のものがあるが、部屋の広さに対して数が多いため大きく移動されることなく使用されていた。飲食は高価な情報機器がおかれている部屋以外は全面的に可能な空間であった。

Hunt Library は 4 階建てであり、建物 2 階以上がラーニングコモンズ空間となっていた。書籍自動書架の他に、2 階ディスカッションスペースの低書架、個別学習空間にある程度高さのある書架があり、そこにおさめられていた。ディスカッションスペースと個別学習空間とは区切られてはいるが、扉は存在しない。また個別学習空間は天井を吹き抜けにすることによって音がこもるのを防いでいた。机は可動式の物と固定式のものがあり、どちらも多くの学生に使用されていた。全体的に飲食が可能であったが、個別学習空間のみ食事は不可であった。またグループ学習室を中心とした設計になっており、開かれたディスカッションスペースでは比較的静かな本を用いた利用、グループ学習室では PC 等の機材を持ち込んだ議論が行われていた。

North Carolina State University では、Hunt Library, D. H. Hill Library 両館において全面的に学生に自由に空間を利用をさせていた。またインタビューを通して、どちらの図書館においても図書館員が利用者に利用方法を指示するようなことは行っていないことが明らかとなった。しかし禁止事項は、イラストを用いて示してあった。

2.2 University of Illinois

Undergraduate Library は Main Library の地下一階に設置されており、1フロア全体がラーニングcommonsの機能を有している。書籍は雑誌(大衆紙)等の薄いものが数冊設置されている程度であった。個別の学習空間は存在せず、入って左手側に設置されている丸型のテーブルは一人学修、右手側に設置されている四角型のテーブルではグループでの利用が多くされていた。グループ学習室は両端に設置されており、左手側のつい立てで曖昧に分かれている部屋と右手側の仕切りがガラスの部屋の 2 パターンが存在した。学生は前者の部屋は前もって予約することが出来るため、グループ学習を行うと決めて利用する際に積極的に利用すると話していた。テーブルは可動式の机(電源無し)と固定式の机(電源有り)が存在し、どちらも同程度使用されていた。

Grainger Engineering Library は 4 階建てで全階にラーニングcommonsの機能が取り入れられてはいたが、議論は主に一階と最上階に設置された空間で行うよう掲示されていた。書籍は各階の東西に分けて設置されており、書棚に囲まれる形で個別学習空間が設置されていた。一階以外は固定式の机が設置されており、飲食は一階のみ可能で他の階は飲み物のみ可能であった。学生は書籍を用いた学修は各階の書棚のスペースで行い、議論の際は主に一階のグループ学習空間を使用すると話していた。

University of Illinois の図書館内で食事が出来ない理由を図書館員にインタビューしたところ、貴重書を多く保管しておりそれらの資料が汚れることを防ぐ為だと話していた。

3. 考察

North Carolina State University では書籍がある空間ではあまり議論は行われず、グループ学習室のような閉ざされた空間の方が議論を行うためには適しているのではないかと考えられた。日本において学生は LC を使用する際に図書を使用していないのではないかと指摘されることがしばしばあり、議論における図書の役割に関して再度検討する必要があると考えられる。また University of Illinois では開かれた学習空間であっても、そこに設置されているテーブル等の備品や飲食に関するルールによって議論が行われる可能性が示唆された。日本では図書館内での飲食を認めている大学図書館は少なく、議論を活発化させるために飲食に関するルールの見直しを検討することが望まれる。一方で日本人には図書館での飲食において、特に臭いの面から嫌悪感を示す人がいる。そのため空間的配置に関しても熟考する必要があるのではないかと考えられる。今後は本調査によって得られた知見を基に仮説を立て、実験を行う。

謝辞

今回、このような貴重な機会を与えてくださった図書館情報メディア研究科、知識情報・図書館学類および茗溪会支部図書館情報学橋会の皆様には深く御礼申し上げます。また本研修を実施するにあたり、多くの支援とご指導をいただきました指導教員の中山伸一先生、長谷川秀彦先生、静岡大学の宮崎佳典准教授に心より感謝申し上げます。